

書評

『永遠の仔』

加藤 林太郎

また少年犯罪である。中学生が小学生を突き落とすという事件があった。こういったニュースを聞くたびに、過去の、例えば「酒鬼薔薇聖斗」の事件や、少年によるバスジャック事件を思い出し、暗い気持ちになる。もう私は法で定めるところの「少年」ではない。しかし、「酒鬼薔薇」事件のとき私は高校生であったし、弟は容疑者と同じ年であった。人事ではない。そんな風にしたことが、未だに少年犯罪のニュースを聞くたびに思い出される。そして、時期をほぼ同じくして、渋谷に出かけた少女達が監禁される事件が起こった。一方で加害者になった少年がいて、もう一方には被害者になった少女がいる。その度に叫ばれる親の責任、姿勢、子育て…。私にはもう窺い知ることにはできないが、そのニュースを見ている今少年である子供たちは、何を思うのだろうか。そして、世の親たちは、自分の子供をどんな気持ちで見つめるのだろうか。

『永遠の仔』には、そんな要素が見事に描かれている。詳しい内容をここで触れてしまうと、作品の素晴らしさが損なわれてしまうのでそれは避ける。なので、背景だけ紹介するが、物語は、とある病院で知り合った一人の少女と、二人の少年によって展開される。少年時代と青年時代、その二つの物語が、交互に、リンクしながら綴られていく。少年期、彼らは同じ病院に入院していた。小児専門の精神科である。彼ら以外にも、親による虐待、いじめなどで心を病んだ多くの子供たちがそこにはいる。精神科、という響きには、残念ながら依然差別意識が付きまとっている。だが、物語で描かれている子供たちは、奇妙でも、異常でもない。むしろ、私たちの心の一部を切り出して作られたような、愛すべき子供たちである。例えば、親に理解されず、愛されようと必死になっている少年がいる。だが、それは決して特別なこ

とではない。子供のときに、親に自分のことをわかってもらおうと思う感情は、あなたにもあったはずだ。彼らは、私たちよりも素直で、その分傷つきやすい、私たちの心の中にいるような人物たちだ。

その経験をもった彼らが、大人になって再会する。共通の「ある事件」を経験した彼らは、その記憶から逃れるかのようにバラバラになり、そしてある日、偶然と必然が重なり合って、再び出会ってしまう。そうして綴られる青年期のストーリーには、過去の「事件」と再び向き合い、葛藤していく彼らの姿が描かれている。弁護士、看護師、刑事と、それぞれの立場で向き合う三人。しかし、その奥には常に少年時代の記憶があり、彼らは過去に直面し、今の自分と過去の自分を見つめて、苦悩する。その中で変わっていく三人の関係が、とてもスリリングに描かれているのが、青年編である。

そして、「親」という存在が、全編を通して一つのテーマになっている。彼らの親の姿は、善であり、悪であり、すなわち人間の姿である。彼らのしたことに、三人は深く傷つくが、親達が全くの悪かということ、そうではない。子供を愛する気持ちと、親である前に人間であるという気持ちが揺れ動き、苦悩する姿も、作者はリアリティを持って描いている。

「少年」という言葉の後には、必ずと言っていいほど「犯罪」がつくような世の中である。そして、いつしか被害者は記号になり、少年という存在が魔物化していく。しかし、少年は魔物ではない。私たちと同じ人間である。この本は加害者であり、同時に被害者である少年の姿を、リアルに描き出している。そして、責任を問われている親たちの心も、同時に描いている。犯罪報道の恐ろしさは、加害者も被害者もその関係者も、ただの記号になってしまうことと、報道が悪者探しに終始してしまうところにある。『永遠の仔』は、少年犯罪に関わる全ての人に人格を与え、犯罪の裏にある顔と心に光を当てる、そんな本である。

かとう りんたろう

(専攻科 東アジア言語・文化専攻)